



戦後の混乱期に学び、半世紀以上にわたって発光生物の研究に情熱を傾け続ける下村博士の足跡をたどる。

下村脩名誉博士 顕彰記念館

長崎大学で過ごした
学生時代から

ノーベル化学賞受賞まで。
下村博士の軌跡をご覧ください。



下村脩名誉博士顕彰記念館(薬学部/柏葉会館)

生命科学に欠かせないツールとして、世界中の研究室で使用されている GFP (Green Fluorescent Protein: 緑色蛍光タンパク質)。下村博士は、GFP の発見で 2008 年ノーベル化学賞を受賞。長崎大学ではその功績を称え、今年 3 月、「下村脩名誉博士顕彰記念館」を創設しました。

館内 1 階に設けられた展示室には、戦後間もない学生の頃や薬学部助手時代の貴重な写真、代表的な論文、ノーベル賞授賞式の際の写真パネルなどを展示しています。

下村博士が GFP 発見に至る大きなきっかけとなったのは、1960 年アメリカのプリンストン大学への留学でした。

そこでオワンクラゲと出会い、発光物質を抽出する研究が始まりました。そしてまず、発光タンパク質イクオリンを発見。そのとき、イクオリンは青色に光るのに、なぜクラゲは緑色に光るのか? という疑問を持ち実験を続け、1961年に GFP を発見しました。それから 70 年代にかけて GFP の発光メカニズムの解明を成し遂げるまでに、研究室のメンバーが総動員で集めたオワンクラゲの数は、実に 85 万匹に達したといえます。

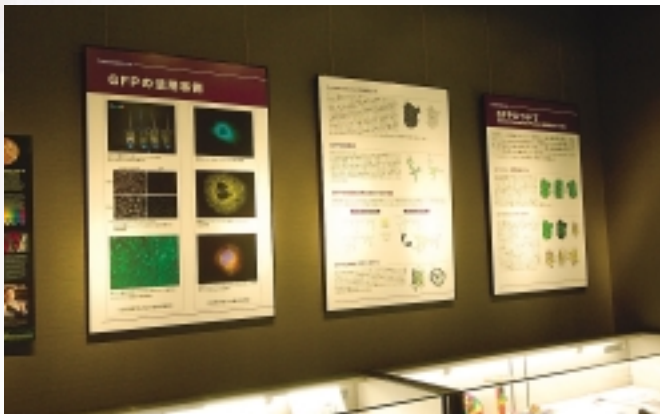
「どんな難しいことでも、努力すれば何とかなる」と話す下村博士。信念をもって地道な研究を続け、人類に貢献したその姿は、若い研究者たちを大いに勇気づけてくれるに違いありません。



ノーベル賞授賞式の写真パネルのほか、受賞者およびゲストのみに配られる晩餐会招待状などの貴重な資料も展示。



長崎医科大学附属薬学専門部(現在の薬学部)の学生だった頃(後列左から2番目)、長身で目立つ存在。寡黙で勉強熱心だった。



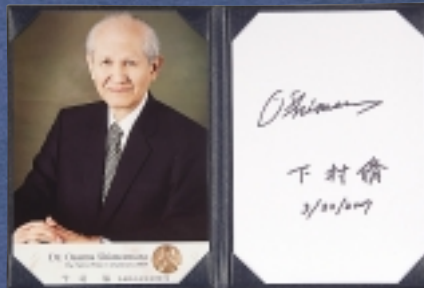
生命科学の研究に大きく貢献している GFP。その活用事例なども紹介している。



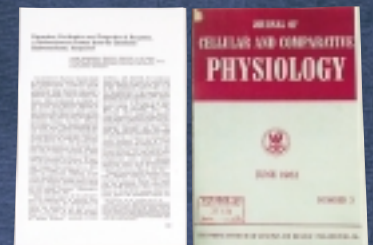
薬学部助手時代の下村博士(右)、恩師、安永峻五教授(中央)と。



本年3月22日、中部講堂で開催されたノーベル化学賞受賞記念講演DVD「ノーベル賞受賞の原点 - 長崎大学 -」。



オワンクラゲの採集網。網やグリップに工夫が加えられている。黒と橙のしま模様はプリンストン大学の定番柄。



GFP の存在を初めて記録した1962年の論文。

薬学部
下村脩名誉博士顕彰記念館
(薬学部/柏葉会館)
見学可能時間
平日 10:00 ~ 17:00

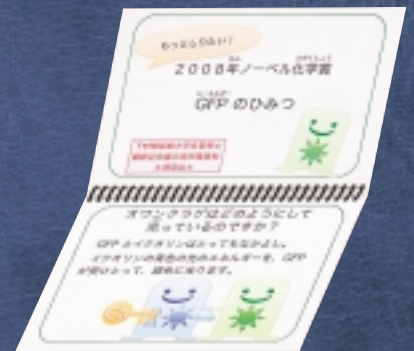
水産学部
環境科学部
教育学部

工学部

正門



レンズをのぞきこむと GFP の蛍光を見ることができる。



GFP について分かりやすく説明した、子ども向けの冊子。